

ギリシアの小詩二

一 好きな人に贈る

Phainetai moi kenos isos theoisin——Sappho.

あの人は本当に神仙中の人、
あの人とあなたが向かい合って坐り、
近くであなたの甘い話と、
嬌なる笑を聞けば、
わたしの心中をどきどきさせる。
そつとあなたを眺めやっただけで、
声も出せない、
舌が強ばる、
微妙な火がわたしの全身を走る、
目は何も見えず、
耳はただぶんぶんいう音しか聞こえない、
全身に汗が流れ、
身体中がただ震えるだけ、
わたしは草の色よりなお蒼白になって、
死なんとする人のように衰弱する。
しかしわたしはすべてを投げ打とう、
こんなに不幸である以上は。……

わたしはまことに十二分に狂妄である、それでようやくサッフォーのこの残詩を訳す気になった。スインバーン (Swinburne) のようにギリシア文学に精通し詩歌の天才を持った人でもまだ翻訳しようとは思わないと言うのに、まして他の人なら、詩の解らないわたしなどさらに言うまでもない。しかしながら、詩を訳す人は難しいと思う、というのは原本と比べられるようなよい詩に訳そうとするのは確かに不可能であるから。わたしの考えはこの二千五百年前のギリシアの女流詩人を紹介し、彼女の詩意を訳そうとするに過ぎない、だから敢えて試してみるのである。しかしそれでもあまりに大胆であることを免れない。わたしは賦体・騷体あるいは長短句でこの詩を訳せるとは信じないし、また中国語で「サッフォー調」が創作できるかどうかも知らない、——たといできたところで、わたしの能力以外のところにあるから、あっさり散文で書いた方が少しはさっぱりするに越したことはない。いまその方法を用いた。

サッフォー(Sappho=注音字母ムヤ々ㄐㄛ〔拼音符号では sapo〕、詩の中では Psappho と自称する) キリスト前五世紀に生まれ、中国では周の襄王の時に当たり、プラトンは十番目の文芸の女神と言った。アテネの立法者ソロン(Solon) は甥たちがサッフォーの詩を吟ずるのを聞いて、大いに喜んで、すぐに伝授させた、ある人がそれを聞いてどうしてそう急ぐ必要があるのかと聞

いたところ、彼は答えて、「わたしがこれを学んでから死ぬようにするためだ」と言ったそうである。『ギリシア詩選』の中にその小詩三首が録してあり、序詩に「サッフォーの〔詩〕は少ないけれども皆バラである」(Sapphous baia men alla rhoda)と云い、九巻あったが、のち教会によって禁燬され、世に伝わらない。近代の学者が類書・字典・文法書の中から百二十余を集めたが、多くは単行片句で、完全なのは十に一しかない。十行以上のものは二首しかなく、いま訳したのはその一つである。

この詩は普通 Eis Eromenan と称され、訳して「好きな人(女性)に贈る」と云う。三世紀のロンギヌス(Longinus)の著『崇高論』(Peri Hypsous)第十節に見える。著者は文章の選択と配合法を説明しようとして、この詩を例に引き、最後に次のように云う。

「これらの徴候はすべて恋愛の真の結果であるが、この詩のよいところは上に述べたように最も顕著な情況に精審な選択と配合を加えているところにある。」だから逆にこれは恋の病(と嫉妬)の詩的描写だとも言え、なかなか青年の玩味に供する足る。

この詩の中には少し奇怪なところがある。つまりいわゆる好きな人が一人の女の友(Hetaira)を指すことである。後人はすなわちアナクトリア(Anaktoria)であると云う。サッフォーは故郷のレスボスで講義をしたが、従う者百人ほど、十四人の女性の友と女弟子(Mathetria)が最も親しく、アナクトリアはその一人であったと云う。この関係から後世女子のある種の同性の恋愛をSapphismと称するが、実はあまり妥当ではない。女性の友達の関係は必ずしもそのように変態的なものではなく、我々も何行かの詩を根拠に彼女らの事情を推測することはできない。要するにこれは一篇のよい詩であるからには、我々は関連することを少し説明して、紹介すればよいのであって、他のことは構わなくてよい。

原詩はワートンの『サッフォー集』第四版重印本(Wharton, Sappho, 1907)に拠った。〔民国十六年〕三月十七日附記。

※初出：1925年3月30日『語絲』第20期

* 日本語の訳には呉茂一訳岩波文庫『ギリシア抒情詩選』などがある。

二 戯れにプラトンの詩を訳す

He sobaron gellassa kath Hellados, he ton eraton
Hesmon eni prothurois Lais ekhousa neon,
Tei Paphiei to katoptrom epe: toie men horasthai
Ouk ethele, hoie d'en paros ou dunamai.

——Platon

「わたしはライス、
昔ギリシアの島はわたしが恣に笑い傲るのを許した、

路地の入り口で少年たちはみな情を傾けた。
今わたしはこの銅の鏡を、
神女の廟に納める。
わたしは今日の白髪とかさかさの皮膚を見とうはないし、
又昔の花の顔を見ることはできないから。」ⁱ

この一首は『ギリシア詩選』に見える。ソクラテスの大弟子のプラトンの作だと云うことであるが、近代の考定学者は、皆あまり確かでないと言う。要するにあの大プラトンよりも少し遅い。それが名詩であることは失わないけれども。ライスは古代ギリシアの有名な妓女であり、多分プラトンと同時であろう。彼女に関してはいくつもの故事が伝わっている。彼女はアテネで、名は一時を風靡して、賢愚老幼群れをなしてその門に赴き、親しくならんと求めた。犬儒ディオゲネスははなはだ気に入られたが、彫刻家のムコンは行ったが拒絶され、白髪をカバ色に染め、また行ったが、ライスは笑って言った。「バカだねえ、昨日あんたの親父さんが来たが、わたしやもう断ったのに、あんたも真似しようってのかい？」あとでライスはスパルタに行って、やはりとても有名であったが、女たちに恨まれて、ある日愛の神の廟の中で殺された、時にキリスト前三百四十年ごろだと云う。古人はものを献納したり像を造ったりしたが、だいたい題詞をつけた。ただライスは鏡を献じたのは後人の擬題であるはずで、上述の伝説によれば、彼女は古希まで生きたとは限らない——このような考証はいささか痴人夢を語るの気味があるけれども。この四行詩は例によってギリシア人のほとんど吝嗇に近い言い方を用いていて、とても簡要に作られている。直訳すれば次のような意味である。

「我ライスは、かつてギリシアに笑い傲った、若者たちが、門前に群集した、いま鏡をパフェイアの女神に献ずる。わたしのいまは見たくないし、わたしの昔は見るができないから。」

わたしの前の訳文と比べてみると、実にあまりに「大胆」だと言える。しかしカンタベリ詩人叢書本にガーネット博士 (Richard Garnett) の訳詩を見つけたが、大胆という点は決してないわけではないと思う。その詞に云う。

Venus, from Lais, once as fair as thou,
Receive this mirror, useless to me now;
For what despoiling Time hath made of me
I will not, what he marred I cannot, see.

だがこれはどうもあまり教訓にならない、ましてやちゃんとした古典の作品が、わたしによって詩余のようなものに変えられて、文詞が優れていないのは言うまでもないが、格調にしたところで大いに違っている。こうした訳法はまことに鳩摩羅什師ⁱⁱの嫁取りのように手本にはならない。だからわたしは「戯れに訳す」と声明したのである。戯というのは真面目な仕事ではないと言う意味である。民国十五年二月十七日。

※初出：1926年3月1日『語絲』第68期

i 上掲『ギリシア抒情詩選』 p. 142.

ii 鳩摩羅什の嫁取り 鳩摩羅什は後秦の王姚興に丁重に扱われ、その才能の後世に絶えることを恐れて宮女十人を差し向け寺院とは別の住居に住ませた。それを見た弟子たちはその真似をして妻を娶り寺院とは別に住むようになった。そこで鳩摩羅什は自分の嫁取りが手本にならぬことを示すために、井に針を入れて麺と一緒に食べるという奇跡を行い、弟子たちにも食べるように言った。弟子たちは恐れて鳩摩羅什の真似をするのをやめた。

三 読本抜粋

アメリカのアレン教授の『最初の年のギリシア語』は、とてもよい大学用の教科書である。字母から説き起こすが、最後には続けてクセノホン (Xenophon) の『行軍記』が読める。書中に引用する文章は、文学・歴史のほかエウクレイデスの三、四課の幾何までであるのだ！第七十課にはメレアグロス (Meleagros) の詩*を引いて云う。

Ixon ekheis to philema, ta d'ommata, Timarion, pur;

En esides, kaieis; en de thiges, dedekas.

「君の口づけは粘りつく、
栄子よ、君の目は火だ：
君が見たものは皆火が点く、
君が触れたものは皆粘りつく。」

これはよい恋歌であり、わたしの好きなものだ。アレクサンダー時代のものであるけれども、いささか繊麗さを免れない。七十一課には古代ギリシアの軍歌があり、アイスキュロス

(Aiskhulos=Aeschylus) の悲劇『ペルシア人』の中で、イエス前四百八十年にギリシア人がサラミスの海戦で、この軍歌を歌ったと云う。原文は今はまだその第一行だけを引く。

「Opaides Hellenon ite!

ああ、ギリシアの息子たち、行け、
君の祖国を救え、
君の妻子を救え、——
君の父たる神々の住いを、
君の祖先の墳墓を。

奮闘せよ、皆のために奮闘せよ！」

この一篇はわたしもよいと思う。最後にもう一句「定理」を引こう。

Ta tou autou isa kai allelois estin isa.

民国の新教科書『幾何学』第 2 ページによれば、いま通用する訳語では「同量に等しい量は互いに等しい」となっている。——丁卯春分の日。

※初出：1927年3月25日『語絲』第124期

* 『読本』 J. T. Allen. The First Year of Greek. Macmillan Co.1917. メレアグロス (Meleagros) の詩は上掲『ギリシア抒情詩選』p.164. 「栄子」とは周作人の片思いの人。

四 古詩

今年の北京の初春は五行志の中の天気、民国以来いまだなかったと言え、人事の面でもそうであった。決してわたしが年のことを考えないのではない。実際この天気のせいで、わたしは四月五月には何度も病気をした。近頃また喉痛を患い、家に籠って、退屈な時には古い書物を引っ張り出して暇つぶしをするしかない。『ギリシア古詩選』*という本があつて、墳墓と死について述べた部分を開くと、実に非常によいのがあつて、訳そうとして、何度も試みるのだが、結局うまくいかない。いくつか戯れに偈式に訳してみたが、当然原来の色合いには似ないが、それでも面白いほど変わっている。ここに三首を選んだが、残念ながら半日ばかり使い古したボロぼうきで地面を掃いたが無駄であつた。

一 Karteros en polemics—Anakreon.

「ティモジェドスは 戦いに最も勇猛なり こはその墓表なり 戦の神アーレスは
勇士を惜しまず 怯懦なる者を惜しむ」

二 Tis xenos,o nauerge?—Kallimakhos.

「汝は水難に死せる者 是れ誰か汝を埋葬せん レオンディアス 岸辺に我が骸を得て
ここに墓を造れり 涙を垂れて凶運を念う 自身も亦安からず 海上を漂う鴟の如し」

三 Kuanopin Mousan—無名氏

「黒い目のムーサよ 麗しい声の黄鸝よ 倏忽として墳墓に入りぬ かくて声も息もなし
頑なに石の如臥す 慧しさ榮譽ありき 黄土汝を覆うに 願わくば重きを覚ゆなかれ」

以上第一首は戦死者の墓銘、第二は航海に死せし者、第三はムーサという名の歌姫。もう一首、とても好きなのだけれども、うまく書けず、ただ大意を意識するしかない。これも無名氏の作、大抵ローマ時代の作品だろう。

Anthea polla genoito neodmet ōepi tumbō,

Mē batos auchmērē, mē kakon aigipuron,

All'ia kai sampsucha kai hudatinē narkissos,

Ouibie, kai peri sou panta genoito rhoda.

「願わくは花々生い立ち、この新墓を繞れ、乾きし荊棘ではなく、悪しき躑躅ではなく、紫スミレ、カワミドリの花、それに湿った水仙こそ。ウィビスよ、願わくば君が周囲に薔薇の満ち溢れんことを。」

上に述べた花は荊棘のほかはすべて確かな訳ではない。紫スミレと薔薇はまだかなり対応できるが、実際には相当違うのだけれども。(一九二七年五月)

※初出：1927年5月28日『語絲』第133期

* 『ギリシア古詩選』 未詳。

五 ギリシアの恋愛詩六首

『ギリシア詩選』の中から六首の小詩を訳して、春蕾社に送った。これらの詩の時代は別に一致しない。譬えば第四首の作者は二千二百年前の人で、生きたのは中国では周末であるが、第六首は六朝時代の作品である。民国十六年九月十五日記す。

一 メレアグロスの作

(Ou soi tout'ebōn? —Meleagros.)

魂よ、我はかつて叫ばなかったか。
女神のせいで、お前は捉えられようとしている、
お前という痴れ者は、もしあの鳥鵜の竿に近づいたなら？
我は叫ばなかったか？いまは網がお前を捉えてしまった。
お前はなぜ空しく網のなかで抗うのか？
愛の神はすでにお前の羽を縛り、お前を火の上に置く、
お前が気を失った隙に乳香を撒き、
ただ熱い涙がお前の渴きを止めるだけだ。

二 前人の作

(Deinos Eros, deinos.)

愛は凄まじいよ、凄まじい！だがなんの役に立つ、
もしわたしが反復して言い、嘆いて、愛は凄まじいと言ったなら？
その子は聞いて笑うだろう、
人から呪詛されて、反って楽しんでいいるのだから。
わたしがもし悪口を言ったなら、それも聞き慣れているのだ。
ただ不思議に思うのは、愛の女神よ、君は紺碧の波から生まれたのに、
どうして水の中からそんな火を生み出すことができるのだ！

案ずるに後世の伝説では、愛の女神 Aphrodite は海中から現れ、愛の神 Eros をその息子とする、形は小児のようで、翼があり、手に弓矢を持ち、射られた者は恋をして、狂ったようになる。だから詩に火と言うのである。

三 前人の作

(Anthodiatie Melissa.)

花を食うミツバチよ、お前はなぜヘーリオドーラの肌に触れ、
春の花を一つ残すのか？
おまえは、それが愛の神の棘だ——
人の心には耐え難く苦しい棘だと思うのに、蜜もあると言うのではあるまいな？
わたしはそうだと思う、お前はそう言ったのだと。
ああ、愛すべきものよ。帰るがよい、
お前の考えは我々はとっくに知っていたのだ。

四 アスクレピアデスの作

(Ouk eim, oud eteon——Asklepiades.)

二十二にもならぬのに、生活に倦み果てた。
愛の神々よ、なぜにわたしを虐めるのか、なぜにわたしを焼きつくすのか？
もしも何かをしでかしたなら、どうするのか？
きみたちはやっぱり何もかまやせん、
相変わらずサイコロを振るだけだ。

五 カリマコスの作

(Helkos ekhon ho xeinos——Kalimakhos.)

客人は負傷した、が誰も知らない。
見よ、彼は胸の底からなんという悲痛な嘆息をついていることか。
彼は今三杯目を飲んだ、
花輪のバラの花びらが地面に落ちた。
彼は確かに熱を出している。
神々のおかげで、わたしの推量はそれほど間違っていない。
賊は賊の足跡を知ることができるのだ。

六 パウルスの作

(Diklides amphetinaxen——Paulus Silentarius)

夕方に乳色の女はわたしの目の前で扉を閉じて、
人を欺く悪口を言った。
「侮りは相思を破る」と——
この言葉は本当ではない。
彼女の侮りはわたしの狂える恋心を増した。
たちどころに一年の断絶を誓ったが、
今朝はもう許しを請いに行った。

附注、乳色の女の原文は Galatea、いましばらくその大意をこのように訳した。

※初出：1927年9月23日『世界日報・春蕾』副刊第5期